

加賀友禅の発展過程：
問屋・染屋・模様師の関係を軸に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 繁子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4781

加賀友禪の発展過程

——問屋・染屋・模様師の関係を軸に——

目 次

1 はじめに	1
2 染屋の歴史（昭和以前）	2
3 染屋と模様師の関係	4
4 染屋と問屋の関係	6
5 問屋・染屋・模様師の関係	8
6 おわりに	9
注	11

1 はじめに

加賀友禪、それは今日では「高級呉服・伝統工芸」ともてはやされ、石川県を代表する伝統産業のひとつとなっている。京都や東京の友禪に比べれば、その規模は小さく生産量も少ないが、質的には決して劣っていない。友禪作家になりたくて県外から金沢へ修業に来る人も多い。しかし、この加賀友禪は京友禪などと比べれば、ここ20年ばかりの間に急成長を遂げた産業なのである。つまり、ちょうど高度成長期に日本全体が量産の方向に進む中であって、手仕事中心の伝統産業ながら見事に発展していったのである。

「加賀友禪」という名前自体、定着したのも第二次大戦後のことである。もちろん染屋は存在していたのであるが、特に着物中心ということもなく、従って染めも地元の染めであるというくらいの意味で加賀染と言われ、古くは御国染などと言われていた。だからと言って、今日加賀友禪と呼ばれている染色の技法が伝統的なものではなく、新しいものと言っているのではない。染色の技法は15世紀、室町時代の頃にはすでに存在していて、「加賀染」という名が用いられている。しかし、その後「加賀染」の示す内容は時代によって地元では梅染→黒梅染→兼房染（黒染）→加賀紋と変わっていつている。（金沢市史編さん審議委員会、1969：584）江戸時代に京都や大阪でよく出版されていた「ひいながた本」にも「加賀染」という言葉はでてくるが、これは他藩の加賀の染色に対する呼び名であって、地元ではそうとは呼んでいなかったようである。「加賀友禪」という言葉はもっと新しく、これも地元からではなく、京都などから加賀の模様染、或いは加賀風のをさしてそう呼ばれていたようだった（花岡、1972：23～38）。

一方、現在の加賀友禪に対する関心度は表1から察することができる。表を見ると、金沢市民はどの工芸品に対しても高い数値を示している。特に加賀友禪の場合、その所有率

〔表1〕主要5品目の知名度・所有率の地域別比較

品目	九谷焼		輪島塗		加賀友禪		山中漆器		金沢仏壇	
	知名度	所有率	知名度	所有率	知名度	所有率	知名度	所有率	知名度	所有率
金沢市民	100%	88.3%	100%	82.0%	99.1%	50.5%	90.1%	49.5%	88.3%	36.0%
北陸	91.1	71.3	83.2	52.5	5.28	0.7	29.7	11.9	23.7	9.9
全国	84.1	53.2	75.4	31.1	53.4	5.7	17.9	5.2	8.1	1.0

(水野、1981：15より)

は北陸・全国と比べて格段の差が見られる。その原因としては、生産地であること、茶会が多いこと、冠婚葬祭が盛大であることなど着物と接する機会が多いということが考えられる(水野、1981：15)。しかし、ここで注目したいのは他の品目では北陸の数値はどれも全国の数値を上回っているのに対し、加賀友禪だけが知名度・所有率ともに北陸は全国を下回っているということである。このことについての議論は以下の章に譲ることにする。

私は以上のような事柄をふまえた上で、伝統産業の加賀友禪が発展していった過程を生産に従事する問屋・染屋・模様師の関係を軸に調べ、その原因を考えてみたいと思う。戦前・戦後を通じての三者の立場の違いや変化、その産業構造の中での各々の役割を明らかにすることによって、伝統産業が現代社会を生き抜いていくにはどうすればいいかという問題について考えていきたいと思う。

問屋・染屋・模様師という三者の関係を考える時、生産の上からも染屋がかなめとなる。そこで今回は染屋を中心とした三者の関係、及び加賀友禪の発展過程を考えていきたい。現在では図案を考え彩色する人を作家とも呼ぶが、ここでは模様師の名で統一することに

する。

2章 染屋の歴史(昭和以前)

染屋にはどのような歴史があるのだろうか。以下ではそれをたどってみることにする⁽¹⁾

第二次大戦前までは染屋は紺屋と呼ばれるのが一般的だった。紺屋というのは中世以来の染めが伝統的に続いてきた職業であり、江戸時代にはいち早く領主的保護を受け、紺屋町もできていた。又、紺屋は株立で、その株を譲り受けただけでなければ開業することができないし、譲り渡すのでなければ廃業することができなから

加賀藩は染色を含めた工芸一般に対して保護政策をとった。各地より染色・漆工・陶工などの名工が招き入れられ、彼らは藩営の施設である細工所で技術を磨くことに専念した。

細工者の生活は完全に保障されていた。ここでつくられた製品は商品には用いられず、もっぱら藩主の自家用と諸大名への贈答用にあてられていた。細工者たちが当時の各工芸の技術の先端を担っていた。一般の職人は細工者から影響を受けながらも、両者の間には技術的な開きがあった。それは前者が技術の追求よりも生活上、売ることを目的として仕事をしてきたからである。

このように江戸時代の工芸には二重性が存在した。つまり、それは藩に保護された名工たちによるレベルのものと一般の職人たちによるレベルのものである。前者においては技術の発展が第一と考えられ、後者においては販売が第一と考えられていた。

染色もこうした工芸の一つとして、同じように二重性を持っていたのである。それを紺屋にあてはめるなら、前者が御用紺屋であり後者が普通紺屋である。御用紺屋が対象としたのは大名・豪商クラスの人々であり、豪華な模様染は彼らによって消費された。このレベルの染物は贈答用の外向けの品物、「加賀染」として、京や江戸へも贈られた。藩が窮乏化し、質素を町人百姓に強要するようになってからは藩主や上級武士はその格式に応じて京都の御用呉服所から京染を買い求めるようになった。

一方、普通紺屋は下級武士や一般庶民を対象としていて、袴・振袖・羽織などの模様染と無地染を主として行っていた表紺屋が一般的だった。そこでは染師（今でいう染屋の仕事をする人）、上絵師（模様師）糊置師、小紋着け（型染）という職人が通いで働いていた。今日はそれぞれ分業した形となっているが、元はこのように紺屋の指揮下にあり、みな紺屋に丁稚として奉公にあがっていたのである。このような形は明治・大正時代にもみられ他に^{カセ}認紺屋といって、糸・木綿・裏地などばかりを染めるところもあったが、その数は少なかった。

細工者などの影響を受けて発展していった模様染は17世紀末から18世紀初頭にかけてピークを迎えた。しかし、18世紀に入ってからには藩財政の悪化とともに、次第に町民百姓に対して儉約の強制が厳しくなり、奢侈禁止令もたびたび出され、衣服の色彩は制限されていった。又、階級によって模様の大きさにも制限が加えられ、模様染の需要は急減した。模様染の衣服は華々しい活躍の場をほとんど失ってしまったのである。そして百数十軒の紺屋の仕事は武士や町人の木綿の日常着、又はのれんや夜具に集中していった。このような状態では模様染の技術は発達していても、それを一般の人々が使える場所はなく、従って地元では広まりようがなかったのである。

以上の染色を見てもわかるように、この時代の工芸はいくら藩によって保護されていたように、それは外から名工を呼び寄せ、一般庶民とは無縁のところで開催された大名文化、つまり「外から持ち込まれた大名文化、という印象はぬぐいされない。このことは藩政時代の工芸全般にあてはまる。

明治維新を迎え、藩が崩壊するとともに、加賀の工芸も大名の手を離れた。しかし、そ

れまで上級武士や豪商などの需要に応じるために作られていたものは容易には一般向けに商品化できなかった。染物の場合は生活に密着したものであったので、幕末の状態を細々と保ちつつ続けていた。しかし、ひとつの産業として成り立つという状態ではなかった。江戸時代に加賀に存在した二つの染色、つまり御用紺屋レベルでの大名・豪商対象の外向けの染色と普通紺屋レベルでの庶民対象の内向けの染色とが融合し、広く一般の人々の手の届くものにすることが必要だった。そのためには加賀染を知ってもらって客層を広げなければならなかった。

維新後の不景気も第一次大戦の戦争景気で回復し成金もあられ、紺屋は当時繁盛した。染め方は今の友禅染ではなく、生地に直接下から火を当てながら墨で模様を描く染め方がなされていた。これは普通紺屋レベルの系統の染めである。この頃、御用紺屋レベルの系統の染め方も「加賀友禅」の名で加賀で一般的になった。それは大正9年(1920)、三越が友禅の振興に力を入れたのがきっかけだった。しかし、地元では藩政時代からの京染の影響が強く続いていた。京都の場合、歴史が古く文化の担い手は金沢と異なって町人たちであったから、紺屋も商売の土台がしっかりしていて、明治になっても適応していった。下からささえ一般の力が強く、江戸時代より商品として流通していたのである。

3 染屋と模様師の関係

前述のように、元は模様師も糊置師も染屋に修業に入ったものだったが、⁽²⁾昭和に近づくにつれ、次第に分業化していった。⁽³⁾模様師を志す者は京都へ修業に出かけた。当時、模様師は非常に少なかった。⁽⁴⁾仕事は染屋からもらっていた。しかし、昭和に入ってから不況と戦争の連続で仕事はなかった。⁽⁵⁾そういう時模様師は染屋に何とか仕事をまわしてくれるように頼みこんでいたという。⁽⁶⁾

一方、その頃の染屋は着物の他に油単(たんす・長持ちなどのおおい)、のれん、ふくさ幕、風呂敷、のぼり旗、印紋(紋のついた風呂敷)、鏡かけ、提灯袋などを扱っていた。着物は京染が知られていて、呉服屋もこの方を歓迎した。友禅染で展覧会に出品する人はいても、まだ商売にはなっていなかった。⁽⁷⁾着物では四つ身、慰斗目(七五三、お宮参りの時の着物)、御羽黒紋付、印付半天などを扱っていた。今と比べれば、つくるスピードはゆっくりで、例えば婚礼用にと春に注文を受けると、単衣、袷、じゅばんなどひとそろえを一年がかりで作ったという。着物はあつらえの注文ばかりで、染屋が能登・富山を中心に北陸三県を自分の足でまわって注文をとっていた。⁽⁸⁾呉服屋を得意先とする染屋と金沢の廓や山中・片山津・芦原などの温泉街の置屋を得意先とする染屋がいた。⁽⁹⁾どちらも客の意向を聞き、その好みに合わせて模様師に図柄を描かせた。このときにもまだ「加賀友禅」は意識されず、知られてもいなかった。

戦争が近づくとつれ、奢侈禁止令、七・七禁令(金のぬいとり禁止)などが出されて模様師のできる仕事はますますなくなっていった。そして、戦争へいく者、転職する者が多くなり、模様染の方は全く衰退してしまった。染屋もやはり苦しい状態だった。経済統制を受けていた時、物資の配給を受けるために石川県染物商工業協同組合が組織された。この組合は小紋屋主体で他にクリーニング屋・呉服屋・無地染の人など友禪に関係なく入っていた。この時は350名ほどもいたのだが、統制が解けると150名ほどに減少してしまった。

戦中から戦後10年間は伝統工芸の最悪の時期で、職人を希望するものなどは余程のもの好きだった。戦後になって染めの仕事ができるようになったのは世の中も落ち着き始めた昭和25年頃だった。¹⁰⁾それはアメリカ向けのマフラーや進駐軍の払い下げの毛布・洋服(丸染め)他に戦前から扱っていた幕、のれん、ふくさなどの仕事だった。模様師はからかさに模様を入れることもした。まだ高い白生地には模様を入れる仕事はほとんどなかった。

それからしばらくして問屋の働きかけなどによって「加賀友禪」が売れるようになった。昭和40年頃からである。そうなると、染屋と模様師の関係に変化があらわれてきた。つまり、以前は染屋が芸者や呉服屋などと直接交渉を行って注文をとってきて、それを模様師にやらせていた。問屋との取引もなくなかったが少なかった。その頃の注文は友禪染にしてほしいというものではなかったから、模様師が特別重視されることもなかった。しかし、手描友禪に人気が集まるようになると、模様師という存在が注目されるようになった。特に金沢の場合は京都などと違って、図案作成から下画、彩色まで模様師が受け持ち、彼にはその製品の質的責任(デザインや配色に対する責任)が課せられる。だから、製作工程の中で模様師にかかる比重は大きくなり、「加賀友禪」の名前が知られれば知られるほど、その存在はクローズ・アップされていった。その着物が売れるかどうかということは模様師の腕にかかっていた。

染屋は友禪の製作工程から見れば、引染・中埋め(これも友禪独特の工程なのだが)部分を受け持っているが、模様師ほど重要視されていなかった。京友禪とは違う「加賀らしさ」が出せるのは模様師の力によるところが大きかった。加賀友禪の特徴は狩野派・土佐派的な絵を基調にして、絵柄が絵画的写実的で線に太い細いの変化があること、模様の外側から内側に向かってのボカシ、花びらや葉の一枚ずつ違った色彩でボカすこと、虫喰い、¹¹⁾蘇芳・藍・黄土・緑・墨の五彩を基調としていること、箔や刺しゅうなど水洗い後の加飾が少なく染めだけで仕上げることなどである。一方、京友禪の特徴は総詰めの図案風で線に強弱はなく、模様の内側から外側にボカすということなどがあげられる。¹²⁾

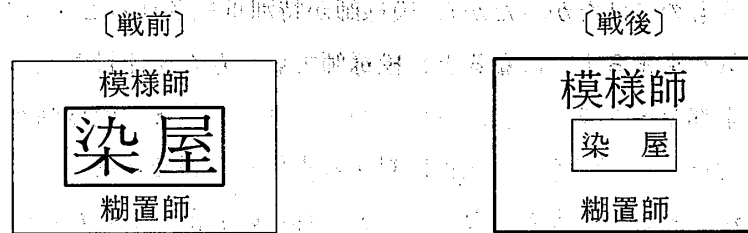
以上のように仕事が友禪染になると模様師が重要になっていった。染屋自体もその役割が変わった。友禪染になって、それまでの万屋的染屋から引染専門となった染屋と悉皆専門となった染屋と引染・悉皆を兼ねた染屋とに分れるようになった。¹³⁾引染専門の染屋は友禪の一工程を受け持つという役割におさまった。引染の中でも黒を扱っているところ、色

物を扱っているところと分化されている。⁹³しかし、悉皆をやっている染屋は分業化された各工程間のパイプ役であると同時に販売側と生産側のパイプ役でもあった。問屋からまかされた白生地を注文通りに製品にして納める責任があった。その責任料、工程間の運搬料として悉皆料を問屋から染屋はもらった。⁹⁴

産業として成立した結果、染屋と模様師は問屋によって新たな枠組みの中に組み込まれた。その体制の中での立場・役割は変わっても、昔からのつきあいがあるところでは心情的には変わっていない。模様師は染屋に対して恩とか義理を感じていて、その両者の取引関係は強いものとなっている。今日では問屋が模様師と直接取引しようという動きがある。⁹⁵中に染屋が入らなければ悉皆料の分だけ商品は安くなり、売りやすくなる。しかし、模様師の方では今までの染屋との関係を思うと、いくらその方が安く売れるといっても、問屋と直接取引することはあまり気がすまないという。それが若い模様師になると違ってくる。彼らと染屋との間には心情的なつながりはなく、その関係は商売上のものだけでドライである。

図1のように、戦前にはしっかりしていた染屋という中核が現在では薄れ、反対に外まわり（産業としてのまとまり）がしっかりしてきたように思われる。

〈図1〉



4 染屋と問屋の関係

戦前には問屋は数軒しかなく、染屋との取引も少なかった。問屋も染物全般を扱っていた。それでも一部の模様師と協力して展示会を開いて友禅染の振興に努めたが、あまり売れなかった。京友禅に比べると加賀友禅は木村雨山氏の言葉を貸りれば「絵柄がべたべたとしてチンドン屋の着物みたい」だったので、相手にされなかった。（田中、1972：200）。地元では着物の価値規準が京都に合わされていた。第1章で書いたように、幕末に近づくにつれ、庶民は儉約を強制され地元の染めが定着しきらないうちに京染が入りこんできたのだ。技術の発展がおさえられて、大正昭和の頃になると加賀友禅を知らない人の方が多かった。加賀友禅の消費者は京都や東京の上層の人々であった。藩政時代からの上層階級向け・外向けという性質から、客層もおのずと限られていた。「はじめに」の項であげておいた「加賀友禅だけが知名度・所有率ともに北陸の数値は全国の数値を下回っている」と

いう事実の原因はこのようなところから推測できるのではないかと思われる。

他の都市には加賀友禪を認めている人がいるのに、地元ではそれをやらずに京都や東京の真似をしていたのだ。そんな状況に変化をもたらしたのは内部からの声ではなく、外部からの声だった。木村雨山氏が友禪染を始めたきっかけは東京から来た商工省の事務官の勧めだった。その時まで彼は金沢独特の染め＝加賀友禪がどんなものか知らなかったという(田中、1972:200)。又、問屋が友禪に乗り出すと決めたのも同じようなきっかけだった。

昭和23年頃から大丸や三越から金沢の問屋に「友禪を復元してみないか」という話はきいていた。¹⁰⁾戦後になって、問屋は訪問着や付け下げの既製品を手がけ始めた。しかし、既製品には安物のイメージがあった。一方、模様師は京都での修業後、戦争のために金沢に戻ってきて数は増加していた。業界の体制は変化しつつあった。

このような状況の中で、問屋は以前から話のあった友禪を手がけることにした。加賀友禪を全国的に売り出すのに必要なことはまず何よりPRすることだった。全国の人々に金沢にも京都に負けない友禪があるということを知ってもらうことだった。それには資本力、組織力、ある程度の投機性が必要であり、その条件が問屋には備わっていた。それまでの中心だった染屋には全国を相手にできるほどの組織力は持ちえなかった。万屋的に仕事をして生計を立てていた染屋には友禪染を外から見直すということはむずかしかった。友禪染を認めるということは自分で新しい価値規準を設けることだった。

染屋の仕事は時代を経るにつれて、次第に各工程へと分業化されていったが、常に生産側の中心だった。だから、生産側の立場の染屋と販売を目的としている問屋とは立場が違い、おのずと見方も違ってきた。染屋の仕事はそれまで生活に密着した庶民のものだった。又、染屋の組織としては戦時中に活躍した組合があったが、その組合は産業としての振興を目的としているのではなく、連絡・親睦を目的としていた(今日では青年部が友禪祭の世話や染料の研究も行っているが)。従って、産業としての発展とはつながらなかったし、友禪染関係者だけの組合ではなかったから友禪振興を推進する母体にはなりえなかった。

他に友禪を売り出すのに必要なことは流通経路・受注体制を確立することだった。現在の最も一般的な経路は染屋→産地問屋→集散地問屋→地方問屋→小売店というものである(加賀友禪振興対策委員会、1980:16)。受注体制としては各問屋は年に二回、主に京都で展示会を開き(京都は土地柄、人も商品も集まりやすいから)そこで追加注文を受ける。追加注文がつくつかないかが重要で、模様師・染屋・問屋などはみな、これらの展示会を念頭におき仕事をしている。

このように問屋はPRによって全国に加賀友禪の名を浸透させ、販路を伸ばしたことで業界に大きく貢献した。¹¹⁾この結果、昭和40～50年代にかけて業界は順調に生産額を増やしていった。その頃は何を描いても友禪なら売れるという時代だった。業界は問屋に大きく

リードされていった。

販売面は問屋がしっかりと握ったので、染屋としては販売経路に製品をのせることが役割となった。各々の役割が分化され、自分に与えられたその役割をしっかりと果たすことで産業として成立したのである。

5 問屋・染屋・模様師の関係

これまでの各章で述べてきたことから、三者の関係として図2のような図式が考えられる。これは取引関係に各々の位置関係を加えたものである。

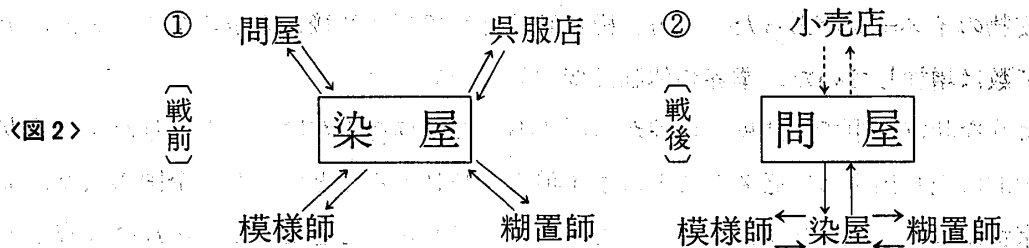


図2の①では染屋を中心に商売されていた。染屋と模様師・糊置師とは親方と職人といった関係で結ばれていた。友禪染はまだ一般に広まっていず、従って産業としての全体的まとまりは薄く、染屋を中心とした関連工程の小さなまとまりが多く存在した。

②では友禪業界が成立しており、それはひとつの産業としてのつながり、まとまりを持っている。この中では問屋が販売面を、模様師が生産面を受け持つ。染屋ももちろん生産にたずさわっているけれど、それだけではなく、問屋・模様師の両方にとっての窓口という役割を持つ。染屋は販売からは離れ（受注体制の変化によって、直接客と接することがなくなったことをさす）問屋に対して生産面での全責任を持つ役割となった。産業体制の中にそれぞれが組み込まれた形となったのである。

このような変化は流通体制の確立に伴って起こったのだと思われる。問屋に引っぱられて加賀友禪の業界は出来上がったのである。これらの関係は見方を変えれば、図3のようにもあらわすことができる。この図では販売と生産との間の距離を問題にしている。

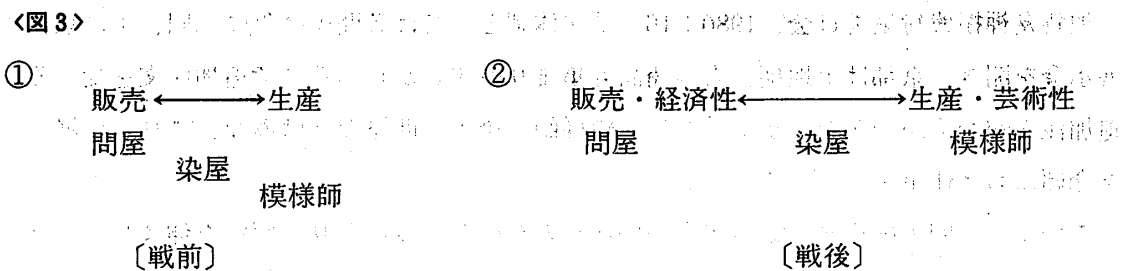


図3の①ではその距離が近かった。染屋の役割にそれがよく表われている。②ではその

距離はどんどん離れていっている。模様師の場合、戦前には着る人の体型、好み、年齢などを頭に入れて色や柄を決めていた。だから注文した人に合う着物をつくるのに苦労したが、反面張り合いがあった。生の反響を聞くことができたからである。⁽¹⁸⁾しかし、今はあつらえではなくなつて着る対象が定まっていけないので、色や柄を考える際には楽であるが、どんな人にも合うようなものを考えなければならない。消費者との距離が遠くなった結果である。

又、以前は自分のつくる着物はこの人に着てもらうんだという意識があり、着る主体があつての着物だった。それに比べて現在30～40代の人（ちょうど友禅がブームになった昭和40年代に独立していった人）の感覚はちょっと違う。彼らは弟子入りの頃から現在までに友禅業界の最も大きな変化を体験したからだ。彼らは着物と着る人とを離れてしまつて、友禅自体を追求しようとする。そして、友禅のもつ芸術性と経済性との矛盾、つまり描きたい柄と売れる柄との不一致による矛盾を彼らは最も痛感している。⁽¹⁹⁾PRによって友禅は浸透していったが、その浸透がかえつて消費者に加賀友禅のイメージを固定化させてしまった。伝統というおおいをまとつた友禅というイメージである。⁽²⁰⁾これから、そのイメージに模様師がどう対処していくのかといふことは友禅の将来にかかわる問題である。

又、販売と生産との距離が開いたことはその両極の間屋と模様師がそれぞれ経済性と芸術性を重視する方向に離れていったということでもある。これ以上両者が離れていかなないように結びつけ、均衡を保つのが間に立つ染屋の役目である。染屋は模様師と同じ生産側の立場でありながら、間屋と同じ経済性を重視する立場でもある。引染の場合は自分の染めたい色というよりも流行色や柄と合う色、売れやすい色を使う。そういう意味で間屋と模様師の両面性を持つ染屋が両者の間に位置しているのは重要である（実際は間屋に押されて売れる柄を描いている模様師が多い）。

友禅が盛んになって業界をまとめる組織が必要となつた。それに応えるように昭和48年には、戦前からの図案研究会が法人化され、加賀染振興協会と改められた。この協会は友禅関係業種の人々がみな入っているが、その中でリードしているのは間屋である。⁽²¹⁾業界は振興協会によって統制されている。「加賀友禅」と言われるためには必ず振興協会の承認が必要なのである。振興協会が品質をこうして管理しているからこそ高級品のイメージを保っていただけるのである。

このように協会としての内部のまとまりは大変重要である。このまとまりを失したら、ひとつの産業としてのつながりも薄れてしまうからである。

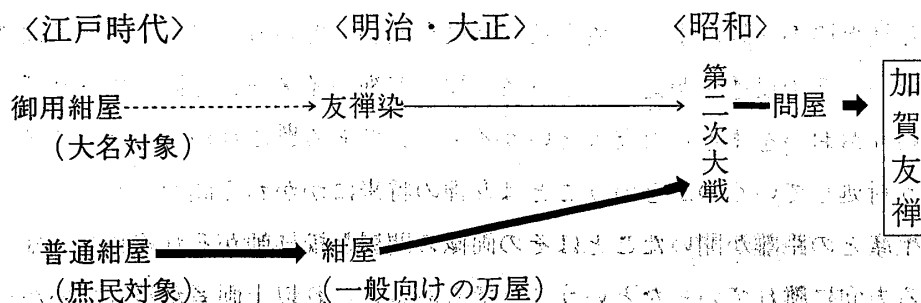
6 おわりに

加賀友禅の発展期は日本の高度成長期にあたり、機械化、量産がさげばれている時期だった。反面、伝統的工芸品産業の振興に関する法律が昭和49年に制定され、加賀友禅は翌

50年に京友禅より一足早くその指定を受けたのである。(水野、1979：3) 加賀友禅は法律の各条件を満たしており、特に糸目糊をおいていることが評価された。²⁹⁾これによって、国からのお墨付きをもらい、この産業の性格は規定され方向づけられた。機械化されている部分もあるけれども、友禅に重要な彩色、糊置、引染は手仕事である。手仕事でなければ友禅の味わいは消え、友禅でなくなってしまう。産業でありながら大量生産を許さないという性質を友禅は持っている。それがかえって稀少価値として認められ、高級品のイメージをつくっている。

さて、加賀友禅は確かに「伝統」的手法を用いた手工業ではあるが、その「伝統」とはどのような内容を持つものだろうか。図4は全体の流れを図式化したものである。図に沿ってその流れを追ってみることにする。

〈図4〉



江戸時代には扱っているものも客層も全く異なった二種類の紺屋(御用紺屋・普通紺屋)が存在した。普通紺屋の系統は着物からのれん、風呂敷などまで扱い、第一次大戦争による好況、維新後・第二次大戦前の不況を経験しながら根強く存在していった。一方、御用紺屋の系統はパトロンであった大名を失い、それまでのような技術を駆使した豪華な着物は行き場を失った。一般の購買力ではとてもついていけなかった。それは商品としては流通しにくかった。そこで技術だけが宙ぶらりんの状態に取り残されてしまったのではないだろうか。その時々模様師が追求することはあったとしても。昭和に入ってから友禅染の技術を用いて文展などに出品する人も出てきた。そして戦後、問屋が技術と染屋とを融合させて「加賀友禅」という商品をつくったのである。

つまり「加賀友禅」の伝統というものは江戸時代の紺屋以来の伝統を持つ染屋の伝統に江戸時代には確かに存在していたであろう友禅染の中抜けの伝統を加えたものではないだろうか。この両者の伝統が合わせられて初めて友禅に重み加わったのではないかとと思われるのである。

今日の「加賀友禅」をつくったのは問屋だと言われることがある。しかし、このように考えてくると、決してそうとは言い切れない。やはり、染屋という存在が大きな位置を占めている。染めの歴史を背負ってきた以上、製作上・流通上の一工程の役割だけではなく、

染屋はそれ以上の存在なのである。生産過程ではよく彩色の作業に目が向けられ、それにあこがれて職につく人も多いが、友禪の伝統を感じさせるものは染屋が行う友禪流しであり、染屋の店先にかかっている大きな古いのれんなのである。²³⁾ 今日、体制は変わってもなお染屋は重要な役割を果しているのである。

今回の調査を終えて感じたことは加賀友禪の新しさと染屋の古さだった。加賀友禪の新しさとは現代社会に適応しているひとつの産業、戦後に発展してきた産業であるということである。染屋の古さとは歴史・伝統であり、日常生活に密着した職業の古さである。この両者はよく錯覚しがちになる。

現代の中で「伝統」だけを頼りに生きていくことはむずかしい。その中に現代感覚をいかに取り入れていくかが重要な問題である。若い模様師の中では、友禪はファッション産業だという感覚が持たれている。²⁴⁾ それはそれで産業の発展にはいいだろうが、友禪染が本来持つ良さが失われてしまわないかと心配である。

(注)

- (1) 染屋の歴史については以下の文献から引用した。金沢市役所、1973：213～214。木村、1970：20～21。下出、1970：160、236～239。竹内、1981：36～45。花岡、1972：〈2〉22、〈3〉23～38。若林、1980：289～290。芳井、1975：140、146。
- (2) 「染屋が自分で模様を描いていた。できないのはしみ抜きぐらいだった。模様師・糊置師というように分業になっていったのは昭和になってから。しかし、全部が全部そうだったというわけではない。」(A氏・調整・男・60)(60=60才代。以下同)
- (3) 「大正5年頃、染物屋へ弁当を持って糊置や中埋めを習いにいった。」(B氏・糊置・男・80)
- (4) 「私が友禪を習う少し前には(昭和初期)作家は4～5人しかいなかった。時間をかけてつくっても食べていけなかった。しかし、習おうという人は増えなかった。庶民のものではなかった。」(D氏・手描・男・60)
- (5) 「昭和11年頃、不景気や2.26事件のあおりで問屋が仕事をくれなくなった。その後、日華事変でますます仕事がなくなった。あっても安い仕事ばかりで、あの時分は食べていくのが精いっぱいだった。昭和15年、7.7禁令が出て問屋は仕事の出しようがなくなり、とめてしまった。」(E氏・糊置・男・70)
- (6) 「仕事を始めた頃(大正末期)は模様師6～7人で糊引師・紋かきなどを合わせても17人ぐらいだった。事変の頃になると、奢侈禁止令が出て失業に近い状態で仕事らしい仕事はなかった(こじきに近かった)。本職はあくまでも捨てずに副業として他のことをしていた人もいた。まあ、仕事は全然ないということはなかった。よほどいい家でなければなかったが、婚礼の着物という注文もあった。」(F氏・手描・男性・70)
- (7) 「昔は私らが仕事をさせたのに、今は描く人の名がでてる。強くなった。品物をむこうが持つてくるのが当然なのに、今はこちらから持つていっている。昔、どん底の時代には仕事がないかと来たくらいなのに(木村雨山さんさえ来た)。」(G氏・染物・男・70)
- (8) 「昭和初期には京染が入ってきていた。呉服店が『地元の染で』と言ったら地元で染め、それを加賀染と言った。」(A氏・調整・男・60)

- 「戦前には、京都へ行って呉服を買ってきて、『京都取引き』と書いていた。加賀友禪は認められて
いず、知られていたのは石川・富山のあたりだった。」(F氏・手描・男・70)
- (8) 「昭和11～15年は能登・石川・富山が売れる範囲だった。染屋の力が強く、染屋が能登・富山の呉
服屋から仕事をもらってきて仕事をさせてやるというふうだった。」(H氏・糊置・男・60)
「富山の呉服屋(中越線沿)からあつらえ染の注文をとっていた。」(I氏・染物・男・60)
「2～3ヶ月に1度、福井・富山を歩いてまわった。初めのうちは知らないところへも自分で頼み
に行き、得意先をつくった。呉服店が主で温泉地や郭へは行かなかった。行っていた人もいたが」
(J氏・染物・男・70)
- (9) 「昔は郭のものをやっていた。仕事に郭の多いか、素人の多いかは呉服屋による。いろいろ回
って注文をとるが、郭とか芦原温泉とかではよくとれた。」(K氏・手描・男・50)
「昭和10年、山中へ行って得意先をつけてから独立した。自分の足で歩いて捜して、山中・大聖寺・
片山津などの温泉街の置き屋を客にしていた。」(G氏・染物・男・70)
- (10) 「戦後、また仕事を始めたが仕事はなかった。ただ、進駐軍の輸出向けのブラウスのしみぬきの仕
事があった。当時、あつらえ染と言って加賀友禪とは言わなかった。あつらえも何日までという日
限はなく、のんびりとやっていた。」(A氏・調整・男・60)
「戦後、すぐには仕事はなかった。皆、食べることに精いっぱい、着る物はボロボロばかりだった
から。しかし、やがてお茶会が始まったり、結婚式に昔買った着物を出して着るようになったりし
て仕事があるようになった。」(L氏・調整・男・60)
- (11) 加賀友禪・京友禪の特徴については以下の文献から引用した。石川県高等学校野外調査研究会1977
:186.金沢市史編さん審議委員会、1969:584.木村、1970:24、85。
- (12) 「昔は万屋で何でも扱っていた。御羽黒紋付、印付半天などを染めていた。友禪染へは急に転換した
というわけではなく、次第に変わっていった。息子さんが引染屋に修業へ行って帰って来てから本
格的に問屋におきめ始めた。昭和51年頃からできたものを呉服屋で買うようになり、今までのよう
では成り立たなくなったから。染めるのも問屋から委託された白生地を染めるということと、別の
染物屋で染めきれないものを染めるという2通り扱っている。後者の方が数の上では多く、ここで
は色を染め、黒は黒染屋に出している。」(M氏・染物・男・60)
「京都には悉皆屋がいるが、金沢では染屋が悉皆を兼ねなければいけないので、染の仕事がはかど
らない。ブームになり、作家が回っていたのでは仕事にならないので、染屋が悉皆を兼ねるよう
になった。今でも悉皆専門の人が10人くらいいる(少しは染もするが)。」(N氏・染物・男・60)
「問屋・染屋はいい情報源になっている。染屋が反物を運びかつ取りに来る。京都は悉皆屋が独立
しているが金沢では染屋が悉皆屋も兼業している。だから、染屋がマージンを皆とっている。染屋
の指示は大切だ。その指示を聞いていけばうまくいく。」(O氏・糊置・男・30)
また、悉皆業は、第二次大戦前には主に型染を扱っていたようである。型染の職人が春(1月)
と秋(8月)に見本をつくり、悉皆屋がそれを買ひ、客にその見本を見せて注文をとるというあつ
らえ染めを扱っていた。
- (13) 「今は黒は黒屋さん、色は色屋さんがやっているが、昔は全部やった。」(P氏・染物・男・70)
- (14) 「問屋は染屋に生地を委託する形になっていて、こちらで失敗すると染屋が責任をとる。染屋は悉
皆料の合計を問屋に出す。」(O氏・糊置・男・30)
「東京の小さい問屋は流行の情報を教えてくれるが、ここらの問屋にはそんな知識がない。本来は
それをするのが悉皆業である。悉皆屋が間に立ってやらねばならない。京都は分業されているから
悉皆屋がいて間を持たないとやっていけない。彼らもまた勉強している。悉皆屋でも連搬だけをし
ている人がいる。それでも仕事としてやっていけるが、私らはそれじゃあいかなと思う。」(I氏・

染物・男・60)

- (15) 最近、悉皆屋抜きで安値で直接、模様師から仕入れて呉服屋に入れようという問屋の動きがある。
(このケースが増える可能性もあるが)そこが複雑で仲々できないだろう。A氏宅にてある問屋の人は、次のように語ってくれた。「今、問屋は形としては悉皆のようなことをしているが、それは少しでも自分のところのものを早く仕上げてもらいたいということをやっているだけで、いわばボランティアのようなものである。本当は中に悉皆屋が入らなければ、もっと安くできるのだが、模様師と問屋が直接取引をしているのは少ない。問屋が染屋を通すのは80~90%である。模様師は昔、食えなかった時代に染屋に助けてもらっていたから、今になって問屋と直接、取引きするとすると染屋に気がねがある。」
- (16) 「昭和22~23年頃、三越・大丸の人が毎年5年間ぐらい来て『友禪を復元しないか』と熱心にすすめられた。『加賀友禪というりっぱなものがあるのに、なぜ京都へ行くのか』と言われて、立ち上がったのが丸与の社長・吉野さん、小川さんたちである(友禪と心中する気で取り組んだ)。それに成竹さん、能川さん、梶山さん、毎日さんが研究してついでいった。」(Q氏・手描・男・70)
- (17) 「商社は何でもやる。金があればできる。何にも知らない職人を使える。そういうことは染屋にはできない。昔、もうからない友禪をやるのはいらんものの子だった。染屋の中心だった時代もあった。京染が押し寄せてきたのに対抗して商社ががんばった。時代によって染屋の強い時代、商社の強い時代がある(商社=問屋)。」(R氏・染工芸家・男・40)
「ブームは問屋のおかげ。商売だけでなく、加賀友禪そのものの魅力にとりつかれ、力を入れて染婆に出してくれた商社もある。」(N氏・染物・男・60)
「ブームは20年ぐらい前から。戦後、景気が回復してきて着物にできるようになった。問屋も加賀友禪を扱っていなかったが、昭和30年頃からポチポチという感じだった(いろいろ扱ってもう他に目新しいものはないかと捜して目をつけた)。」(S氏・手描・男・40)
- (18) 「戦後、独立した頃(昭和24年)はあつらえが多く、染屋といっしょに注文した娘さんも模様師のところへ来て『この娘に合う柄を』と注文した。」(T氏・手描・男・50)
- (19) 「京都は悉皆屋が中心で頭がよく切れた。実権を握っていて、地色はこれ、模様はこれと指図していた。金沢はそういう面が無責任なところもある。売れる柄でなきゃ、問屋はいいと言わない。自分はこういうのにしたいと思っても売れなきゃしょうがないから、そこに問屋との妥協がある。しかし、問屋のリードは大切でそれによって大きく左右される。つくったのも問屋ならそれをつぶすのも問屋である。」(S氏・手描・男・40)
「売り易い物を作ると、自分の力が没になる。問屋はいいものを作ってもお蔵入りになるのを嫌う。」(U氏・手描・女・30)
「売りやすいもの、売れているものの情報を問屋などから仕入れて、そこに自分の個性を入れている。やりたいことだけしてると売れない。加賀友禪には買う方に細かい柄でぼかしがあって多彩であるような固定観念があるようだ。」(V氏・手描・男・20)
- (20) 「宮崎友禪は歴史の重みづけの看板。残っている立派なものは加賀染ではなく、加賀友禪らしい技法も京都でできたものである。本当に金沢でやったのは梅染や夜具など。『ひながた。に『加賀染にさしてくれ』と書いてあるから『加賀ふう。というのはあったのだろう。今では刺しゅうや箔が入っていると、お客さんが『加賀友禪でない』と言う。加賀友禪、という看板があるから売れているのだろう。』(W氏・手描・男・40)
- (21) 「振興会は染屋と商社の推薦がないと入れない。落款、証書は組合が出しているの、模様師は組合に入らないとそれしてもらえない。糊屋は落款を入れないから組合は親睦にすぎない(組合=振興会)。」(X氏・糊置・男・50)
- (22) 伝統的工芸品産業の振興に関する法律

- ①主に日常生活の用に供されるもの。
 - ②その製造過程の主要部分が手工的であるもの。
 - ③伝統的技術又は技法によって製造されるもの。
 - ④伝統的に使用されてきた原材料を主として用いるもの。
 - ⑤一定の地域において少なくない数の者がその製造を行い、又は製造に従事しているもの。
- (23) 「今でものれんのおかげで輪島や会津若松からでも注文が来る。のれんが雑誌に載ったからである」
(P氏・染物・男・70)
- (24) 「伝統にはこだわっていない。着物は昔からやっているから伝統であって、今洋服を着ているように着物を着ているとしたら、友禅もファッション産業だと考えることができる。」(V氏・手描・男・20)

(加藤 繁子)